始めに
聖書の学びがこんなに面白いとは思わなかった。
少人数の私たちだけが聞くのでは、あまりにも勿体ないので、多くの人に知ってもらいたいと思い、家庭集会特集を始めたいと思いついたわけである。
カール先生の学びを私なりに纏めて記載すると同時に、沢山の皆さんにもこの場に参加して様々な思いや、疑問を寄せていただければ幸いである。　　芙美L.

カール先生指導によるアーバイン家庭集会
2014年6月11日

“Feeding of the 5000”
「五千人に食べ物を与える」

聖書に書かれている奇跡の話しを読む時、その奇跡が起こる前の出来事、背後にある出来事、其の後の出来事を聖書から読む事が大切である。この「五千人に食べ物を与える」奇跡が起こる前、マタイの13章53節から58節を読むと、ナザレの人々が、どのようにイエスを見ていたかがわかる。彼らは、イエスを子供の頃から知っているので、イエスがただの大工の息子であり、知恵と奇跡を行う力などあるはずはない、と思っている。だからイエスは「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである。」と言われ、そこではあまり奇跡をなさらなかった、と書いてある。

そして、14章に入ると、1節から12節に、洗礼者ヨハネが首をはねられ殺される事件が書かれている。14章の13節に、イエスはこれを聞くと、船に乗ってそこを去った、と書いてある。それほどまでにイエスは悲しみ、一人になって祈りたかったのだ、と理解できる。イエスは常に一人でどこかに行って祈る。それはイエスが常に神を自分の内に迎え入れる時間を作っているのだと言う事である。

イエスは人里離れた所に行ったにも拘らず、群衆はイエスが行う奇跡を見たくて後をついて来た。イエスは群衆を哀れみ、その中の病人を癒やされた。人里離れた場所であるから、食べ物なども不自由であったろうし、イエスの後をついて来た時は、群衆はお弁当を持って行こう、などと考えなかったに違いない。だから日が暮れて行くにつれて、お腹もすいた事だろう。そのような状況を見た弟子達が、「ここは人里離れた所で、時間もたったから、群衆を解散させましょう、そうすればそれぞれに食べ物を買いに行くでしょう」ともっともな事をイエスに言う。イエスはそれに対して、「行かせる事はない、あなた方が彼らに食べ物を与えなさい」と言われる。弟子達はさぞかし困ったことだろう。

たまたまある人が（子供が持っていたという説もある）５つのパンと2匹の魚を持っていた。弟子がその事をイエスに話すと、イエスはそれを持って来させ、天を仰いで讃美の祈りを唱える。イエスはご自分がそれらの食べ物を祝すのではなく、神の祝福を祈ったのだ。そしてパンを裂いて弟子達にお与えになり、弟子達

が５千人の群衆（この数に女性と子供は別にして、と書いてあるので、実際はもっと多くの人数だったにちがいないが）に食べ物を与えた、全ての人が満腹した後、残ったパン屑が12の籠に一杯になった。イエスが手にされ食べ物は、ほんの少しであったけれど、何倍にもなった。この事から、イエスの御業が永遠に続く、と理解できる。

群衆はこの奇跡を見て、イエスをメシア（救い主）だと思ったに違いない。
（これは余談になるが、その当時のユダヤ人達は、過ぎ越しの季節（春）に
メシアが現れると信じていた。この人里離れた場所で、長い間集っていられたという事は、寒くもなく、暑くもない、春の時期ではなかったかと考えられる。）

最後に、この奇跡の話からイエスは私たちに何を語ろうとしているのだろうかを考えてみよう。
私たちが、“少し”神様に捧げると、私たちの捧げた“少し”が神様によって何倍にもなる、という事ではないだろうか。そして、私たちの持っている物は少しであっても、それを神様に捧げる事によって、神様がそれを何倍にもして下さり、神様の御心の為に用いて下さる。

＊今日の家庭集会から私が感じた事：
本当に、私は小さな者であり、私に出来る事は限られている、なんて諦めないで、神様にこの小さな私を捧げる事によって、神様がこの小さな私を何倍にもして下さり、神様のお仕事の為に用いて下さるに違いない、そう感じた。そしたら突然力が湧いて来た。